

令和元年5月22日現在

機関番号：33404

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2015～2018

課題番号：15K11784

研究課題名(和文) 要支援高齢者の一人暮らし継続意欲測定尺度の開発

研究課題名(英文) Development of a Life Motivation Scale in Cases of Older Adults Living Alone

研究代表者

成瀬 早苗 (naruse, sanae)

福井医療大学・保健医療学部・准教授

研究者番号：60620614

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,900,000円

研究成果の概要(和文)：要支援高齢者の一人暮らし生活意欲測定尺度を開発し、信頼性・妥当性を検討した。方法は、意欲概念や高齢者支援の専門職の意見等を基に尺度原案を作成し、一人暮らし要支援高齢者に77項目5段階のリッカート法にて自己記入式無記名質問紙調査を行い、218名を分析対象とした。分析の結果、最尤法プロマックス回転にて因子分析にて4因子14項目の因子解が抽出された。本尺度は、統計学的に信頼性・妥当性は許容範囲である尺度であると示唆され、要支援高齢者本人や支援者が簡便に使用でき生活意欲の程度を知る指標として活用できる。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究で開発した要支援高齢者の一人暮らし生活意欲測定尺度は、意欲を可視化しそれを得点化することにより簡便に意欲の程度を測定できる。質問項目に回答をすることで、自分自身を振り返り、現在の状態を評価するきっかけとなる。また、高齢者本人と一人暮らし高齢者の支援者とが共有することにより、高齢者が望む必要な意欲に関する支援を捉える手がかりを得ることとなる。さらに、一人暮らし高齢者の支援者は、意欲の低下の原因を探り、高齢者自身のニーズを引き出し自分らしい生活の支援に繋がり、生活意欲の程度の推移を捉えることにより、一人暮らしが困難にならないために早期に介入内容の検討が可能となる。

研究成果の概要(英文)：This study aimed to develop and assess the reliability and validity of a scale measuring life motivation in older adults living alone and requiring assistance. We designed a scale incorporating general notions of desire and motivation, developmental tasks, and opinions of the professionals who supported older adults. A self-administered paper questionnaire consisting of 77 five-point Likert items was then distributed to older adults living alone who required assistance. From the collected surveys, 218 valid responses were used for the analysis. We conducted a factor analysis using maximum likelihood with promax rotation, from which 4 factors and 14 items were extracted.

Our results suggest that the scale developed in this study demonstrates an acceptable level of statistical reliability and validity. The scale can be easily used by both older adults requiring assistance and caregivers who help them, serving as an index to determine fluctuation in an individual's life motivation.

研究分野：老年看護学

キーワード：生活意欲 高齢者 一人暮らし 要支援 尺度

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19、CK - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

日本の一人暮らし高齢者の現状と一人暮らし支援の困難さと支援の必要性

現在わが国は超高齢化社会であり、さらに高齢者数の増加が見込まれている。高齢者数の増加に伴い、一人暮らし高齢者は年々増加すると推定されている。また、長寿国であり高齢期が長い日本においては、健康寿命の延伸が望まれ、住み慣れた地域で自立した生活を送り、高齢者の生活の質の向上を目指す必要がある。しかし、「一人暮らし意識調査」(内閣府,2015)によれば、日常生活の不安や孤立等の問題が存在する。これまでの一人暮らし高齢者を対象とした研究では、一人暮らし支援困難があるが一人暮らし高齢者の生活を支援していく重要性を示唆している。さらに、後期高齢者数も増加しており、75歳以上になると要介護認定者の割合が大きくなる(内閣府,2015)。つまり、要介護状態になることは、一人暮らしを困難にする1つ要因であり、厚生労働省(2006)が推進しているように、介護予防のためにも、要支援者の在宅生活の継続の支援が必要である。そのため、要支援高齢者に焦点をあて、要支援高齢者の一人暮らしの生活をいかに意欲的に継続していけるかを支援するために、「要支援高齢者の一人暮らし生活意欲測定尺度」を開発しそれをもとに生活意欲を支える支援を検討していく必要がある。

2. 研究の目的

(1) 要支援高齢者が一人暮らしを継続するための意欲の要因を明らかにし、一人暮らしの生活意欲を測定する尺度を開発すること

3. 研究の方法

研究デザインは尺度開発、因子探索型研究

(1) 要支援高齢者の一人暮らし生活意欲測定尺度の原案作成

本研究における生活の概念とは、社会福祉学、行動心理学、高齢者心理学、および先行研究を基に、自己の存在を認め、欲求や目標の実現や人生を謳歌する気持ちをもつことを自ら内発し、生きがいもち、精神的に安定しながら前向きに自分らしく生きる能動的意思活動とした。本研究における生活意欲とは、生活がADLに限ったことではないため、前述の生活と意欲の概念を統合し、自己の存在を認め、生きがいもち、自分らしく自分の望む生活を続けようとする意志とした。

要支援高齢者の一人暮らし生活意欲の概念枠組みは、高齢者心理学、意欲や動機づけの概念や理論(櫻井,2009;佐藤・榎藤,2016,原岡,2000) 発達課題(Robert J.Havighurst,1972/児玉,飯塚訳,2004) 先行研究(河野・金川,1999;野村,2005;綾部,2007) 研究者の経験的知見、保健師、看護師、社会福祉士、介護福祉士、介護支援専門員の意見を基に構築した。概念枠組みを構成する要因「情緒的要因」「身体的要因」「社会的要因」「動機づけ要因」「価値的要因」「意欲阻害要因」の6つとした。各々の要因から120項目の尺度原案を作成した。質問の内容的妥当性の確認として、老年看護学や在宅看護学に精通した教員6名と尺度開発経験のある教員3名、要支援高齢者の支援管理者1名で、構成概念と項目の整合性について検討した。さらに表面的妥当性の検討として、研究協力に同意した対象者6名に、質問内容の不明な項目、意味内容が重複している項目、回答困難な表現の項目がないかを検討するプレテストを実施した。質問内容の不明な項目や意味内容の重複項目を削除し、最終的に77項目となり、これを要支援者高齢者の一人暮らし生活意欲測定尺度(以下、本尺度)の質問項目とした。

(2) 調査方法

調査対象施設

対象施設は1,036カ所とした。選定は、47都道府県のインターネット検索で抽出した約4,500箇所の地域包括支援センターから乱数表を用い各県の偏りがないようにした。

研究対象者

対象者は、要支援(1~2)認定者で65歳以上の一人暮らしの高齢者であり、選定基準は本研究の趣旨を理解し協力の可否を意思決定できる認知機能が保たれており、敷地内に家族の居住がない人とした。

データ収集方法

データ収集の手順は、調査協力に同意があった際に配布数を確認し、調査票と返信用封筒を郵送した。地域包括支援センターの介護支援専門員から研究依頼書と自己記入式無記名調査票を対象者候補者に配布してもらい、対象者の研究参加は調査票の返信をもって同意とした。再テスト法を実施するため、1名につき2通の調査票を配布し、1通は2週間以内を目途に、2通目は先に投函した時より2週間後に投函してもらった。

調査内容

回答者の属性は、年齢、性別、一人暮らし年数、一人暮らしになったきっかけ、一人暮らしを継続している理由、主観的健康感とした。主観的健康感は、「自分はとても健康である」~「自分は全く健康でない」の5件法を用いた。

質問項目は、生活意欲を問う質問77項目を無作為な順序で並べ、回答は5段階のリッカート法で行った。なお、「意欲阻害要因」は逆転項目とした。

基準関連妥当性の確認は、「高齢者のエンパワメント尺度」(天野・植村,2011)の35項目を用いた。尺度使用に際し開発者の承諾を得た。

(3) 分析方法

統計ソフトは IBM SPSS Base System 23.0J、AMOS 23.0J を用いた。

項目分析

項目分析は、尖度と歪度による正規性の確認、項目間相関分析、Item-Total Correlation Analysis (I-T 分析)、Good - Poor Analysis (G-P 分析) を行った。項目決定基準は、尖度と歪度が絶対値 2 未満 (藤田, 2008) を正規性の基準とし、項目間相関 .700 以下、共通性 .300 以上、I-T 相関 .300 以上、G-P 分析の上位群と下位群に有意差があるものとした。

妥当性の検討

構成概念妥当性

構成概念妥当性の検討として、項目分析で整理した項目を最尤法、プロマックス回転による探索的因子分析を行った。因子数の決定は、スクリープロットで因子数を推定し、共通性、パターン行列、全分散を説明する割合を確認し、固有値 1.0 以上、因子負荷量 .300 以上を項目決定基準とした。下位尺度の因子を解釈して因子名をつけ、確認的因子分析を行い、モデル適合度を算出した。

基準関連妥当性

基準関連妥当性の検討として、本尺度 14 項目と「高齢者のエンパワメント尺度」(天野・植村, 2011) の得点間についてピアソンの相関係数を求めた。

信頼性の検討

内的整合性の確認は、尺度全体と各因子のクロンバック係数を算出した。安定性と再現性を確認は、再テスト法を実施しピアソン相関係数を求めた。

回答者の属性における本尺度の分布の比較

属性における比較は、一元配置分散分析を行い、有意差が認められた場合は Tukey HSD (Tukey honestly significant difference test) で多重比較した。

(4) 倫理的配慮

研究協力は自由意思に基づくものであり、拒否した場合でも不利益を被らないこと、結果の公表において個人情報、プライバシーの保護が遵守されることを文書で説明した。同意は対象施設には同意書の提出で、対象者には調査票の返送をもって得たものと判断した。以上について金沢大学医学倫理審査委員会 (審査番号 699-1, 2) および新田塚医療福祉センター倫理委員会 (新倫 28-65) の承認を得て実施した。

4. 研究成果

同意が得られた施設は 53 施設、配布数は 340 部であり、回収数は 221 部 (回収率: 65.0%) であった。分析対象数は、記入漏れのあった 3 部を除外した 218 部 (有効回答率: 64.1%) とした。

(1) 回答者の属性 (表 1)

後期高齢者が 89.0% 占めており、女性が 84.7%、一人暮らし年数は 10 年以上が 58.7% であった。一人暮らしになったきっかけは死別が 76.6% と最も多く、一人暮らしを継続している理由は「家族が亡くなったから」39.4%、「今の家から離れたくないから」10.1% であった。主観的健康感は、「自分はあまり健康でない」と回答した人

表 1 回答者の属性

項目	人数 (%)
n = 218	
年齢	
65~69 歳	4 (1.8)
70~74 歳	20 (9.2)
75~79 歳	29 (13.3)
80~84 歳	66 (30.3)
85~89 歳	70 (32.1)
90 歳以上	29 (13.3)
性別	
男性	35 (16.1)
女性	183 (84.7)
一人暮らし年数	
3 年未満	22 (10.1)
3~5 年未満	26 (11.9)
5~10 年未満	42 (19.3)
10 年以上	128 (58.7)
一人暮らしになったきっかけ	
若い時から	11 (5.0)
別居	21 (9.6)
離別	9 (4.1)
死別	167 (76.6)
その他	10 (4.6)
一人暮らしを継続している第一の理由	
家族が亡くなったから	86 (39.4)
今の家から離れたくないから	22 (10.1)
誰もいないから	22 (10.1)
同居できないから	20 (9.2)
人に迷惑をかけたくないから	18 (8.3)
この地域が好きだから	7 (3.2)
一人が好きだから	5 (2.3)
人の世話になりたくない	3 (1.4)
家を住み替えられないから	3 (1.4)
施設に入れないから	0 (0.0)
その他	32 (14.7)
主観的健康感	
自分はとても健康である	4 (1.8)
自分はまあまあ健康である	65 (29.8)
自分の健康はふつうである	51 (23.1)
自分はあまり健康でない	86 (39.4)
自分は全く健康でない	9 (4.1)
不明	3 (1.4)
回答者の居住地域 (総務省統計局: 地域区分)	
北海道	9 (4.1)
東北	20 (9.2)
南関東	16 (7.3)
北関東・甲信	30 (13.8)
北陸	18 (8.3)
東海	6 (2.8)
近畿	36 (16.5)
中国	14 (6.4)
四国	32 (14.6)
九州	37 (17.0)

記述統計、度数分布

表 2 「要支援高齢者の一人暮らし生活意欲測定尺度 (14 項目 4 因子)」の探索的因子分析状況

項目番号	(因子名) クロンバック α 係数 項目内容	第 1 因子	第 2 因子	第 3 因子	第 4 因子	共通性
第 1 因子 (人生を楽しむ力) α = .781						
30	趣味を楽しんでいる	0.771	0.005	-0.008	-0.054	0.557
47	何をしたいか目標をもっている	0.652	-0.014	0.121	-0.036	0.460
21	今の生活を楽しんでいる	0.594	0.024	0.042	0.223	0.569
34	心から楽しいと感じる	0.473	0.122	-0.020	0.261	0.484
第 2 因子 (精神的適応力) α = .650						
35※	毎日の生活に疲れを感じている	0.010	0.759	-0.176	-0.043	0.426
23※	自分自身に自信がない	0.156	0.712	0.035	-0.199	0.453
28※	今の生活に不満がある	0.044	0.453	0.003	0.182	0.368
第 3 因子 (生活の活力) α = .726						
45※	毎日をなんとなく無駄に過ごしている	0.140	-0.099	0.828	-0.059	0.649
51※	時間が無駄に過ぎていくという感じがする	0.003	0.027	0.735	-0.128	0.490
60※	毎日することがない	0.015	-0.059	0.542	0.091	0.313
76※	一人暮らしに限界を感じている	-0.100	0.255	0.366	0.105	0.346
第 4 因子 (一人暮らしを受け入れ味わう力) α = .709						
38	幸せだと感じる	0.299	-0.084	-0.140	0.812	0.780
37※	今の生活はむねしく感じる	-0.054	0.249	0.159	0.446	0.638
70※	孤独を感じる	-0.214	0.285	0.186	0.331	0.381
因子間相関		第 1 因子	1.000			
		第 2 因子	0.355	1.000		
		第 3 因子	0.351	0.405	1.000	
		第 4 因子	0.463	0.568	0.479	1.000

最尤法、プロマックス回転、全分散を説明する割合 49.376%、※は逆転項目
意欲尺度全体のクロンバック α 係数 .650

が 39.4%と最も多かった。

(2) 項目分析

正規性の検討

正規性は、各項目の得点の尖度と歪度で確認し、基準の絶対値 2 未満以外の 25 項目を削除した。

項目間相関

本尺度 14 項目の項目間相関は、項目決定基準の .700 以下であった。

I-T 分析

本尺度の各 14 項目とその項目を抜いた合計の相関は、.399 ~ .670 ($p < .001$) であり、本尺度 14 項目は決定基準の .300 以上を満たす有意な相関を示した。

G-P 分析

合計得点から全体を 4 群に分け、各項目の上位群 (51 名) と下位群 (58 名) の平均得点を t 検定により比較したところ、すべての項目は $p < .01$ を示した。

(3) 構成概念妥当性の検討

探索的因子分析と因子間相関(表 2)

正規性の確認で偏りの大きかった 25 項目を削除後、最尤法、プロマックス回転を選択し探索的因子分析を行った。スクリープロットを確認し、因子数は 4 とし再度因子分析を実施し、共通性の低い「棲家を変えることは不安である」など 9 項目を削除した。尺度の精度を高めるため尺度作成経験者と共に、項目決定基準やクロンバック 係数の変化を繰り返し確認し項目の精選を行った。質問項目の項目数・質問内容の検討を行い、最終的には、全分散を説明する割合 49.376% を示す 4 因子 14 項目を本尺度の構成因子として採用した。因子間相関は .355 ~ .568 であった。

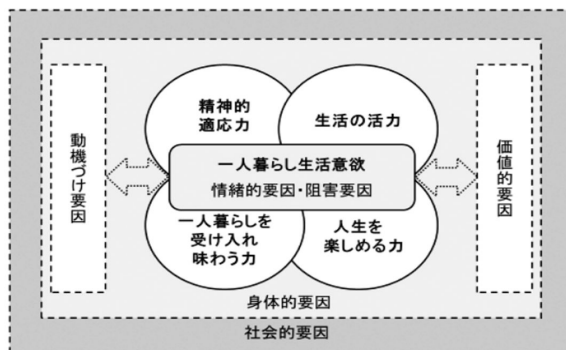
因子の命名

は逆転項目、「」は質問を示す。第 1 因子は、「趣味を楽しんでいる」などの 4 項目で構成されていた。これらは、未来を考え楽しむことから構成されていることから、<人生を楽しめる力>と命名した。第 2 因子は、「毎日の生活に疲れを感じている」などの精神的不適応な状態を表す 3 項目で構成されていた。これらには自己を変えて状態に適応したいという意欲が潜んでいると考え<精神的適応力>と命名した。第 3 因子では、「毎日をなんとなく無駄に過ごしている」などの 4 項目は、気力の低下に関する内容で構成されていた。これらには生き生きとした生活を望む意欲が潜んでいると考え<生活の活力>と命名した。第 4 因子は、「幸せだと感じる」などの 3 項目で構成されていた。これらには自分の状態を受け入れて人生を味わうことで一人暮らしの意欲となる享受力と関連があると考え、<一人暮らしを受け入れ味わう力>と命名した。仮定した概念枠組みに抽出された 4 因子の構成を表し、概念図(図 1)で示した。

確認的因子分析(図 2)

探索的因子分析で採択された 14 項目の適合度指標は、 $\chi^2 = 169.907$ 、 $df = 71$ 、 $P = .000$ 、 $GFI = .901$ 、 $AGFI = .853$ 、 $CFI = .894$ 、 $RMSEA = .080$ 、 $AIC = 237.907$ であった。

(4) 基準関連妥当性の検討(表 3)



本尺度の測定する要因：情緒的要因・阻害要因 (明らかになった4つの要因を実線で示した)
一人暮らし生活を支える基盤となる要因：身体的要因・社会的要因 (四角点線で示した)
一人暮らし生活意欲に影響する要因：動機づけ要因・価値的要因 (生活意欲と相互作用があるため、双方向矢印で示した)

図 1 要支援高齢者の一人暮らし生活意欲の要因の概念枠組み

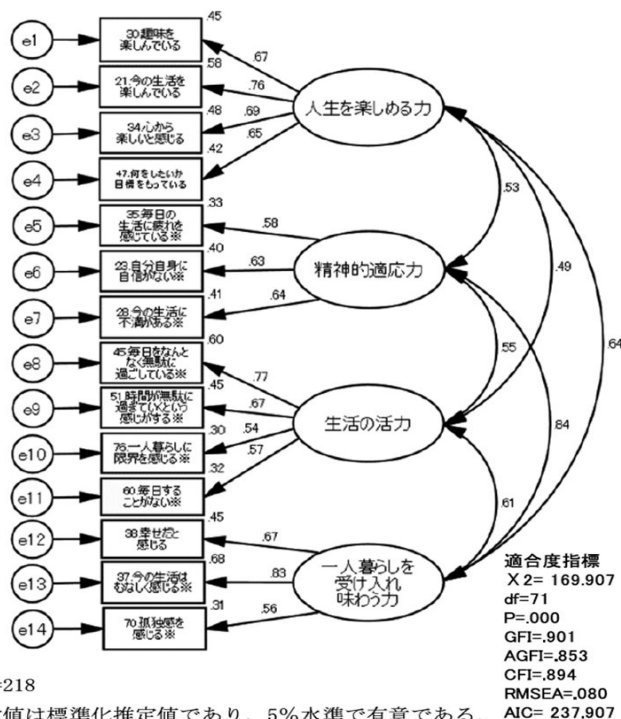


図 2 「要支援高齢者の一人暮らし生活意欲測定尺度」の確認的因子分析の結果

高齢者エンパワメント尺度(天野・植村, 2011)と本尺度 14 項目の尺度全体及び 4 つの下位尺度において、 $p < .01$ 水準で有意な相関がみられた。

表 3 「要支援高齢者の一人暮らし生活意欲測定尺度」4 因子と高齢者エンパワメント尺度¹⁾との関連

n = 218

	要支援高齢者の一人暮らし生活意欲測定尺度				尺度全体
	人生を楽しむ力	精神的適応力	生活の活力	一人暮らしを受け入れ 味わう力	
高齢者エンパワメント尺度	403**	531**	540**	761**	726**

ピアソン積率相関係数 ** $p < .01$ 1) 天野・植村 (2011)

(5) 信頼性の検討(表 2)

本尺度のクロンバック

係数は尺度全体 .850、下位

尺度 .650 ~ .781 であった。

再テスト法の回収数は 169 部(回収率 77.5%)であった。再検査信頼係数は、<人生を楽しむ力>.717、<精神的適応力>.867、<生活の活力>.901、<一人暮らしを受け入れ味わう力>.901、<全体>.762 であった。

<引用文献>

天野瑞枝、植村勝彦(2011): 高齢者のエンパワメントの構造に関する研究 尺度作成およびその信頼性、愛知県淑徳大学論文集、心理学部篇(創刊号)、1-9

綾部明江(2007): 要介護高齢者の在宅生活継続に関する影響要因とケアの視点、日看科会誌、27(2)、43-52

原岡一馬(2000): 人間行動の心理学、49、73-84、ナカニシヤ出版、京都

Havighurst, R. J. (1972) / 児玉憲典、飯塚裕子訳(2004): ハヴィガーストの発達課題と教育(第2刷新装版)、159-172、川島書店、東京

藤田譲(2008): 血液透析への効果的な対処、人間福祉学研究、1(1)、31-42

河野あゆみ、金川克子(1999): 在宅障害老人における閉じこもり現象の構造に関する質的研究、日看科会誌、19(1)、23-30

厚生労働省(2006): 要介護認定に係る法令、Retrieved from:

<http://www.mhlw.go.jp/topics/kaigo/nintei/gaiyo4.html> (検索日: 2017.10.19)

内閣府(2015): 平成 27 年版高齢社会白書、56-63、日経印刷株式会社、東京

野村千文(2005): 「高齢者の生きがい」の概念分析、日看科会誌、25(3)、61-66

櫻井茂男(2009): 自ら学ぶ意欲の心理学(初版)、3-36、75、81-155、有斐閣、東京

佐藤眞一、権藤恭之(2016): よくわかる高齢者心理学(初版)、24-27、100-129、173、ミネルヴァ書房、京都

5. 主な発表論文等

[雑誌論文](計 2 件)

成瀬早苗、加藤真由美、上野栄一、地域高齢者の楽しみ・はりあい、看護実践学会、査読有、31 巻 2 号、2019、35-47

成瀬早苗、加藤真由美、要支援高齢者の一人暮らし生活意欲測定尺度の開発、日本看護科学会誌、査読有、Vol.38、2018、97-106

DOI: 10.5630/jans.38.97

[学会発表](計 7 件)

成瀬早苗、加藤真由美、要支援高齢者の一人暮らし継続意欲測定尺度の開発、第 37 回日本看護科学学会学術集会(於 宮城県 仙台国際センター) 2017

成瀬早苗、上野栄一、要支援高齢者の暮らしに関する研究の特徴 - テキストマイニングの解析から -、第 23 回ヘルスカウンセリング学会学術大会(於 千葉県 市川市文化会館) 2016

成瀬早苗、上野栄一、The trend of research concerns of the care of housebound senior who live alone(和訳)一人暮らし生活高齢者のケアに関する研究の動向 - Health Reserch & Practice from Asia ACHP2016(於 神奈川県 パシフィコ横浜) 2016

成瀬早苗、上野栄一、高齢者の生きがいに関する研究の特徴 - テキストマイニングの解析から -、第 22 回ヘルスカウンセリング学会学術大会(於 千葉県 明海大学) 2015

成瀬早苗、出村佳子、加藤真由美、上野栄一、高齢者の捉える在宅生活の「楽しみ」と「はりあい」 - テキストマイニングの解析から -、第 41 回日本看護研究学会学術大会(於 広島県 広島国際会議場) 2015

成瀬早苗、出村佳子、加藤真由美、上野栄一、在宅生活高齢者の捉える健康管理 - テキストマイニングの解析から -、第 20 回老年看護学会学術大会(於 神奈川県 パシフィコ横浜) 2015

成瀬早苗、上野栄一、加藤真由美、一人暮らし高齢者に関する研究の特徴 - テキストマイニングによる分析 -、一般社団法人日本看護研究学会第 28 回近畿・北陸地方会学術集会(於 石川県 金沢大学保健学類校舎) 2015

[図書](計 0 件)

〔産業財産権〕

出願状況（計 0 件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年：
国内外の別：

取得状況（計 0 件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年：
国内外の別：

〔その他〕

6. 研究組織

(1) 研究分担者

研究分担者氏名：加藤 真由美
ローマ字氏名：Mayumi Kato
所属研究機関名：金沢大学
部局名：保健学類
職名：教授
研究者番号（8桁）：20293350

研究分担者氏名：関 睦美
ローマ字氏名：Mutumi Seki
所属研究機関名：福井医療短期大学
部局名：医歯学系
職名：講師
研究者番号（8桁）：60707876

(2) 研究協力者

研究協力者氏名：上野 栄一
ローマ字氏名：Eiichi Ueno

研究協力者氏名：増田 真也
ローマ字氏名：Shinya Masuda

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。